回向成就の信

――本願成就の教説――

小野蓮明

一

親鸞によって開顕された浄土真宗の仏道は、『教行信証』「行巻」の一乗海釈において、「誓願一仏乗」と喝破されたように、群萌に開かれた一仏乗であり、如来の本願を根拠として成立つ無上仏道である。如来の本願とは、「ちかいのようは、無上仏にならしめんとちかいたまえるなり」（「聖典」五一一頁）と言われるように、生死流転の衆生の全てを我が国に生らしめ、無上仏に成らしめなければ、仏、自ら仏としての正覚を取らない、という仏の誓いである。しかし親鸞における本願理解の特徴は、如来の本願を、そのような大悲の願心として理解するだけでなく、むしろ本願の成就の教説、すなわちわれら衆生の身の事実にまでなっている本願、本願成就の教説に立って本願を了解されたというところに、大きな特徴がある。本願の意義を本願成就の教説に立って明らかにされたのが、『教行信証』の教学である。

本願成就の教説は、『大無量寿経』下巻の最初に、

仏、阿難に告げたまわく、

それ衆生ありてかの国に生ずれば、みなことごとく正定の聚に住す。所以は何ん。かの仏国の中には、もろもろの邪聚および不定聚なければなり。（第十一願成就文）

十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功徳の不可思議なることを讃歎したまう。（第十七願成就文）

あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。心を至し回向したまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得て不退転に住す。唯五逆と誹謗正法とを除く。（第十八願成就文）

（「聖典」四四頁）

と、第十一願、第十七願、第十八願の、それぞれの成就文が一連に教説されている。正定聚に住して真実報土の生を得ることが、証大涅槃を意味することであると誓う、第十一願、その真実報土をわれら衆生に開示する行としての名号を誓う、第十七願、そしてこの諸仏称揚の如来の名号に喚び覚まされた願生浄土の心、すなわち証大涅槃の真因である本願の信の成就を誓う、第十八願の、それぞれの成就文である。いまこの本願成就の教説に注意するとき、本願の成就ということは、本願が果力である南無阿弥陀仏の正覚を成就したという客観的事実を意味するだけでなく、「聞其名号信心歓喜乃至一念。至心回向」と教説されるように、聞信歓喜の一念に「至心に回向したまえり」という、衆生一人ひとりにおける主体的信の成立を意味するものである。十方衆生を我が国に生らしめんと招喚し、生らしめなければ自ら正覚を取らないと誓う、本願の成就は、そのような本願招喚の声に喚び覚まされて、如来の願心に自覚的に生きる主体的信の成就の他ではない。衆生における信心の成就を離れて、本願の成就はないのである。本願の成就とは、衆生における信心の成就以外の何ものでもないということを、親鸞は、本願成就文の教説に感得されたのである。

本願が成就するとは、如来の本願が現在の「今」の時に実現し満足することであり、現在の時は、つねに主体における信心成就の「今」の時を離れてはないのである。衆生の信心成就の現在に、久遠成就の本願が、また十劫成就の

仏が、その時を同じくして、今現在に真に満足し成就するのである。衆生の信心成就の現在に、まさにその時を同じくして、その今現在に仏としての正覚を真に満足し成就するのである。

『教行信証』の後序で親鸞は、自らの帰本願の回心の表白と『選択集』の書写、真影の図画を記し、その真影の銘に、法然の真筆をもって「南無阿弥陀仏」の名号と、善導の本願加減の文と呼ばれている文とを書いて戴いた、と感銘深く叙述している。善導の本願加減の文とは、

もし我成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称せんこと、下十声に至るまで、もし生まれずば正覚を取らじ。かの仏今現在にましまして成仏したまえり。まさに知るべし、本誓重願虚しからざることを、衆生称念すれば必ず往生を得と。

（「聖典」三九九頁）

である。『選択集』の書写、真影の図画は、元久二年（一二〇五）親鸞三十三歳の時である。善導のこの本願加減の文に本願の成就ということを読み取る眼を開かれたのではないか。（本願成就文の親鸞独自の訓み方は、恐らく異訳の経『無量寿如来会』の本願成就文に導かれたものであろう。）弥陀の成仏は、十劫成就の久遠の仏でありながら、しかも「彼仏今現在成仏」といわれる。それは、今現在のわれら衆生の信心の成立において、その時同時に、今現在に仏としての真の正覚を成就するものであるからである。「彼仏今現在成仏」と衆生における信心成就は、一念同時である。それが「成就」ということの内実なのである。十方衆生を我が国に生らしめんと誓う本願の成就は、その本願招喚の声に覚醒されて、如来の願心に帰して生きる主体的信の成就の他ではないということを、親鸞は、本願成就の教説に見開かれたのである。殊に第十七願成就文と第十八願成就文の教説に、そのことを深く読み取られたのである。親鸞が「よき人」と仰ぎつづけた法然の「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という発遣の声に出遇って、「雑行を棄てて本願に帰す」と表白された回心の体験の因位の光景を、第十七願・第十八願の成就文の教説に感得されたのである。「十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功徳の不可思議なることを讃歎したまう」

という第十七願の成就とは、具体的に何を意味するものであろうか。「十方恒沙の諸仏如来」とは、ガンジス河の砂粒ほどの無量の諸仏のことであるが、親鸞の信仰体験においては、まず念仏者・法然である。その法然は、善導の「一心に弥陀の名号を専念して、行住座臥、時節の久近を問わず、念々に捨てざるをば、これを正定の業と名づく、かの仏願に順ずるがゆえに」（「聖典」二一七頁）という『観経疏』「散善義」の教言に値遇して、「立ちどころに余行を舎てて、ここに念仏に帰」（『選択集』・「真聖全」一・九九三頁）されたのであった。すると「十方恒沙の諸仏如来」とは、念仏の教えに帰して、念仏に生きる歓びをえた無数の念仏者のことである。その諸仏如来が、「みな共に無量寿仏の威神功徳の不可思議なることを讃歎し」ている、〝われらを招喚してやまない、如来の本願を聞け〟と。諸仏如来の讃嘆の声は、帰するところ「南無阿弥陀仏」の名号を聞け、という一言に凝集するのである。第十八願成就文に「聞其名号信心歓喜乃至一念」といわれているように、その名号に如来の功徳を讃嘆する言葉を聞き、その声に喚び覚まされて、歓喜に満ちた大悲への深い目覚めを得るのである。信心とは、諸仏如来の讃嘆する念仏の声を聞き、それに育てられ導かれて、本願に自覚的に帰して生きるものとなるという、大いなる目覚めなのである。

二

「聞其名号信心歓喜乃至一念」といわれているように、「信心歓喜、乃至一念」という歓喜に満ちた清浄な目覚め、すなわち信の一念は、偏に諸仏の称名において如来の功徳を讃嘆する言葉を聞き、それに育てられ導かれて、歓喜に満ちた大悲への深い目覚めを得るのである。

ところが本願成就の教説は、さらに重要なことを語り告げている。そのことを親鸞は、成就文の「至心回向」の願言を、「至心に回向したまえり」と訓むことによって、その意義を明瞭にされたのである。もともと一つの本願成就文を、親鸞は「信巻」三心一心問答の信楽釈と欲生釈とにおいて、前後に二分して了解された。

本願信心の願成就の文、

『経』（大経）に言わく、諸有の衆生、その名号を聞きて信心歓喜せんこと、乃至一念せん、と。

（「聖典」一二八頁）

本願の欲生心成就の文、

『経』（大経）に言わく、至心回向したまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得、不退転に住せんと。唯五逆と誹謗正法とを除く、と。

（「聖典」一三三頁）

親鸞は、本願成就の事実を語り伝える成就文を、本願信心の願成就文と本願の欲生心成就の文とに分け、「至心回向」の願言を「至心に回向したまえり」と訓むことによって、本願の成就は、本願力の回向成就であり、衆生における信心の成就の他ではないことを感得されたのである。至心とは如来の真実心のことであるが、その如来の真実心が、われら衆生の上に信心として実現し成就する、というのである。信心とは、如来の真実心である願心が、衆生の上に回向成就した事実であると、すなわち信心とは、如来の清浄願心の回向成就であると、感佩されたのである。

本願成就の文を本願成就の文と見ることは、親鸞が始めてではなく、すでに浄土の祖師において了解されてきたことであった。しかし法然までは、この成就の文は、

諸有の衆生、その名号を聞きて信心歓喜して、乃至一念至心に回向して、彼の国に生ぜんと願ずれば、即ち往生を得て不退転に住す。唯五逆と正法を誹謗することを除く。

（『浄土宗全書』一・一九頁・傍点筆者）

と、連続して読まれてきたのである。もしこのように連続して読むならば、至心信楽の願成就の文といわれつつ、至心回向の願の成就と何ら区別がなくなる。つまり「至心回向」の主体が、如来か衆生か、その判別が不明瞭となる。だから親鸞は、「その名号を聞きて信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向したまえり」と、全く独自の訓み方をすることによって、至心回向の願と厳密に区別された、至心信楽の願の成就たる意義を明瞭にされたのであった。

至心信楽の願を、どこまでも至心信楽の願の成就として了解しようとされたところに、親鸞の独創的な訓み方の意図があるのである。親鸞の訓み方によって、何が明らかになったのかといえば、衆生に開かれる信心とは、「心を至し信楽して我が国に生まれんと欲え」と招喚してやまない如来の願心が、われら衆生の上に回向成就した事実以外の何ものでもないということ、すなわち信心とは、如来の願心の回向成就した心そのものであるということが、明瞭に尋ねあてられたのである。

如来の本願とは、浄土を喪失して無明海に流転し続けているわれら衆生を、「我が国に生まれんと欲え」と招喚し、「もし生まれざれば正覚を取らじ」と誓い続ける、如来の大悲願心であるが、その如来の大悲心は、現実にどこにあるのかといえば、現にわれら衆生の上に発起している本願の信、一心帰命の信として実現しているのである。その事実を親鸞は、本願成就の教説にはっきりと読み取られたのである。親鸞は、如来の大悲心に帰した一心帰命の信を、つねに「選択本願の行信」と捉えた。本願の名号に開かれた根源的な覚醒、すなわち帰命の信は、如来の願心がわれらの上に本願の行信として実現したものであることを、本願成就の教説に見開かれたのである。無明流転の衆生を「我が国に生らしめん」とはたらく大悲願心が、われらの上に行信として実現している事実と道理を、「至心に回向したまえり」という転訓に見開いたのである。

本願の成就は「如来の清浄願心の回向成就」であるという深義の発見が、親鸞の本願成就の教説の決定的な理解である。

しかれば、もしは行・もしは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまうところにあらざることあることなし。

（「聖典」二二三頁）

「信巻」において、行も信も「如来の清浄願心の回向成就」であると断言された。願心の回向成就、何と難解な表現であろうか。回向成就ということは、如来の願心が、いまわれら衆生に発起した信心として体験された事実であり、

あるいは、いま衆生に発起した信心は、如来の願心そのものの衆生への現前現成である、ということであるまいか。そうであるとすれば、信心は、自らの信心の源泉乃至は根拠として、つねに如来の願心を深々かと自証するのである。すなわち如来の願心と衆生の信心とは、決して別ではなく、一如である、と自証するのである。信心と願心とは、一応二つの事柄であるが、しかしこの二つは、信仰的自覚の事実と根拠として一つである、という頷きである。如来にあっては願心といい、衆生にあっては信心というが、その信心は願心の回向成就として一如であり、体は一である、という了解である。本願の成就は本願力回向の成就であり、それは衆生における信心の成就であり、信心の成就は如来の欲生の願心の回向成就であるということ、それが親鸞における本願成就の教説の了解である。

信心と願心は体は一であり、回向成就として一如であるという独創的な信仰理解の自覚と根拠を尋ねた思索が、「信巻」の三心一心問答である。それは、世親自督の一心帰命の信と本願の「至心信楽欲生」の三心とは、信仰的自覚の事実と根拠として決して別ではなく、一如であるという、深義の解明である。親鸞が自らに回向成就した信心を通して、自らを招喚し続けた久遠の願心を推求して、願心を自覚の明るみにまで齎しめた思索が、三心一心問答である。帰命の信心と如来の願心とが回向成就として一如であるということは、「帰命は本願招喚の勅命なり」（「聖典」一七七頁）という「行巻」の名号釈で、すでに尋ね当てられたように、帰命の信とは、衆生が如来に帰依信順した心である以上に、如来が衆生に名告り出て、衆生における如来自身の自己成就である、ということである。本願の成就は、『歎異抄』の跋文において、

聖人のつねのおおせには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。

（「聖典」六四〇頁）

といわれたように、「親鸞一人」という信仰主体の成就する時と別ではない。本願の成就は信心の成就であり、信心の成就は「親鸞一人」といわれる信仰主体の成就である。また「一人」という信仰主体の成就する現在に、久遠成就

の本願が、したがって十劫成就の仏が、獲信の親鸞の今現在に真に成就するのである。十劫成就の仏も、信決定における衆生の往生決定の現在に、まさにその時を同じくして、その現在に仏としての真の正覚が満足成就されるのである。

三

それでは、願心の回向成就としての信心の自覚内容とは、一体どのようなものであろうか。

本願の教説については、世尊の根本教説である『大無量寿経』に、法蔵菩薩の発願と修行、その成就が阿弥陀仏の因位として説かれている。法蔵菩薩の発願と修行、すなわち五劫思惟の本願と兆載永劫の修行の教説は、一般に法蔵説話とか法蔵物語といわれる。しかし親鸞は、それを単に説話としてではなく、如来の願心がわれらの自我煩悩心の底を破って名告り出て、尽十方無碍光の世界に生らしめんとはたらく行信の、いわば因位の光景を表わすものとして了解されたのである。

「帰命は本願招喚の勅命なり」という親鸞の鋭い根本直観は、一心帰命の信の主体は、本願の主体である法蔵菩薩であるという、信仰主体の根源的覚醒ないしは自証を意味している。信心の主体が本願の主体である法蔵菩薩であるとすれば、因位の仏・法蔵の発願と修行の自証なくして、親鸞の信仰的自覚も、またわれらの帰命の信の自覚内容も明らかにすることはできない。法蔵菩薩となって誓い発された仏の願行の自証が、信心の最も具体的な自覚内容である。そうであるとすれば、われらに一心帰命の信が獲得されるまでには、如来の本願招喚の勅命とわれらの自我煩悩心との激しいぶつかり合い、闘いともいうべき因位の光景のあることを、決して見落としてはならない。無始以来一如に背き自己の自我心を恰も主体なるものとして執し続けてきた自己に、その自我心との熾烈な闘いを通して、遂にその自我心を根底から打ち砕いて、自己における真に主体なるものとして現前し名告りえた主体、それが信心の主体

としての法蔵菩薩である。

『大無量寿経』の教説によれば、法蔵菩薩とは、一人の国王が師仏である世自在王仏の教説を聞いて深く感動し、国を棄て王位を捐てて沙門、すなわち求道者となって、無上正真道を求める志願を発された求道の主体の名であった。その叙述の神話性が、いまや完全に非神話化され主体化されて、一心帰命の信の主体こそ法蔵菩薩である、と感佩されたのである。象徴的に語られた法蔵菩薩の五劫思惟とか兆載永劫の修行ということも、実はわれわれの意識にものぼらないような内面の最内奥における自我心との熾烈な闘いの永さと深さを意味し、遂にその執拗な自我心を摧破して、求道の根本主体である法蔵の願心が、真に我れなるものとしてわれら衆生に発起してくる因位の光景、それを最も具体的に語り現わすものといえよう。求道の根本主体である法蔵の願心が、衆生の内なる煩悩心とのあくなき闘いを通して、われらの上に真に主体なるものとして発起し現前してくる因位の光景を具体的に現わすもの、それが本願における第十八・十九・二十の三願であるといえないであろうか。

たとい我、仏を得んに、十方衆生、心を至し信楽して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれずは、正覚を取らじ。唯五逆と正法を誹謗せんをば除く。（第十八・至心信楽の願）

たとい我、仏を得んに、十方衆生、菩提心を発し、もろもろの功徳を修して、心を至し願を発して我が国に生まれんと欲わん。寿終わる時に臨んで、たとい大衆と囲繞してその人の前に現ぜずんば、正覚を取らじ。（第十九・至心発願の願）

たとい我、仏を得んに、十方の衆生、我が名号を聞きて、念を我が国に係けて、もろもろの徳本を植えて、心を至し回向して我が国に生まれんと欲わんに、果遂せずんば、正覚を取らじ。（第二十・至心回向の願）

（「聖典」一八頁）

この三願において、法蔵菩薩となった仏は、三たび「設我得仏十方衆生」と呼んで、「欲生我国」と招喚し、「不取

正覚」と誓い続けている。それは、無明流転の衆生を自己となし、衆生の苦悩のすべてを荷負うて立ち上がり、迷妄の衆生を「我が国に生らしめん」とはたらく、仏の衆生救済の決意の深さとそのはたらきの絶対性を現わすものであろう。そのかぎり「設我得仏十方衆生」と呼びかけられる衆生とは、仏は自らの外に見い出した衆生ではなく、仏は自らの内に虚妄流転の衆生を発見し、だからこそ法蔵菩薩自身、流転の衆生となってはたらく仏の相であるといえないであろうか。法蔵菩薩が自ら流転の衆生と現じ、衆生の無明性と罪障性の一切を自らに荷負うて、「我が国に生らしめん」と立ち上がったのが「若不生者不取正覚」の誓いであるといえよう。法蔵において発願された仏の本願は、十方衆生を無始流転の衆生と知らしめ、その衆生を真に我れとなし、「我が国に生らしめん」と誓い、仏の国に生らしめることにおいてのみ、自らの本願を満足成就せんとするのである。

しかし、十方衆生を無始流転のものと知らしめて「我が国」に生らしめることは、至難の業である。そこに第十八願の誓いの上に、さらに第十九・第二十の二願を誓い発されなければならない理由があったのであろう。

第十九願は、「菩提心を発し、もろもろの功徳を修して、心を至し願を発して我が国に生まれんと欲わん」と衆生に喚びかけられた願である。ここでの衆生は、発願して諸の功徳の善根を修し、それを回向して浄土を願うものである。この願の特徴は「発願」である。しかし修諸功徳による発願は、すでに善導が『観無量寿経』の至誠心を釈して、

もしかくのごとき安心・起行を作すは、たとい身心を苦励して、日夜十二時、急に走め急に作して頭燃を灸うがごとくするもの、すべて「雑毒の善」と名づく。この雑毒の行を回して、かの仏の浄土に求生せんと欲するは、これかならず不可なり。

（「聖典」二一五頁）

と喝破されたように、いかに堅固な発菩提心も、それが衆生のものであるかぎり、遂に破綻せざるを得ないのである。したがってこの願に立つ人は、「寿終わる時に臨んで、たとい大衆と囲繞してその人の前に現ぜずんば、正覚を取らじ」と誓われたように、僅かに臨終来迎に期待をかけるより他ないのである。臨終現前の願、現前導生の願といわれ

る所以である。

それに対して第二十願は、定善・散善の破綻において、確かに念仏に帰した念仏の立場である。しかし「我が名号を聞きて、念を我が国に係けて、もろもろの徳本を植えて、心を至し回向して我が国に生まれんと欲わん」と誓われているように、功徳の本としての名号を、なおも自力をもって執持せんとする立場である。親鸞は、この願の立場に立つ人を『浄土三経往生文類』で、次のように述べている。

> 定散自力の行人は、不可思議の仏智を疑惑して信受せず、如来の尊号をおのれが善根として、みずから浄土に回向して、果遂のちかいをたのむ。不可思議の名号を称念しながら、不可称・不可説・不可思議の大悲の誓願をうたがう。
>
> （「聖典」四七三頁）

如来の尊号をも己が善根として私し、大悲の誓願を疑う、最も深刻にして執拗な自力執心に生きる立場である。これ植諸徳本の願ともいわれる所以である。

このように第十九・二十願を確認して見ると、両願とも直接的には、われら衆生の立つべき真実なる実存の立場ではない。第十八願の真実に転入転換すべき立場である。しかしまた、第十九・二十の二願は、単に否定されるべきものであろうか。むしろ、その両願の底に法蔵菩薩の衆生を摂取せんとする具体的な現働、すなわち法蔵の願心の衆生摂化の躍動を読み取ることができないか。法蔵菩薩の願心に立って見るとき、一々の願は、すべて衆生の無明流転を批判し純化しようとする仏の智慧のはたらきであり、同時に、そこに照らし出された罪業深重のわれらすべてを摂取救済しようとはたらく、仏の大悲心そのものである。それゆえに親鸞にとって、この二願は、「すでにして悲願います」（「聖典」三二六、三四七頁）といって、「あまねく諸有海を化し」（同・三二六頁）「諸有の群生海を悲引」（同・三四七頁）したもう「悲願」そのものであったのである。

第十九・二十の両願は、衆生の願往生心に応じつつ、衆生を批判し純化せんとする本願の具体相であり、同時に、

衆生摂取の具体的現働として、根本願である第十八願の「欲生我国」の大悲招喚より展開されたものである。すなわち第十九・二十の二願の立場を転じて、第十八願の「欲生我国」の招喚の声に立たしめようとはたらく、法蔵菩薩の衆生における現前現成の歴程である。しかもその現前は、衆生における自我煩悩心との闘いを通して、それを根底から打ち破って現前し現行する過程であり、いわば衆生救済の歴史である。同時にそれは、主体的には衆生における法蔵願心の自覚過程である。親鸞のいわゆる三願転入といわれている表白は、われら衆生における法蔵願心の現前現成の過程であり、同時に法蔵願心の自覚過程なのである。

それ故に、第十九・二十の両願が方便の願といわれても、それは真実の願と区別された単なる方便ではなく、「真実方便の願」といわれるように、真実による方便であって、第十八願の「欲生我国」の大悲招喚から開かれ展開されたものである。したがって方便の願は、真実の願の具体的現働であり、具体的内容なのである。では、本願の根底としての第十八願の根源は何であろうか。実は第十八願自身もまた、自らの「欲生我国」の願心から生み出されたものである。その意味で、「欲生我国」は、本願における本願展開の原理であり、本願自証の原理なのである。

四

本願における本願展開の原理も、本願を自証する原理も、ともに本願自身の内にあり、それが根本本願である第十八願の「欲生我国」の欲生の願心である。本願自身を展開し証明する原理としての「欲生我国」の願心は、同時に、本願の摂取救済を自証する信心の原理でもある。

親鸞は、すでに『教行信証』「信巻」の三心一心問答において、願心と信心との一如性、すなわち帰命の信は、如来の願心の回向成就として一如であるということを、自らの獲信の体験と強靱な聞思の思索を尽くして推求されたのであった。そこでは、本願の三心について、至心は如来の真実心、信楽は如来の大悲心、欲生は如来の回向心である

と了解され、その一々は、衆生の救済において如来が真に如来たらんとする如来の大悲願心であって、いずれも法蔵菩薩の願心の現前現働として了解されている。仏意釈における願心推求において、一見虚仮不実なる衆生心と清浄真実なる如来の願心との対比を通して推求されているが、しかしそれは単なる平面的な対比ではなく、あくまでも自らに回向成就した信を通して如来の願心を尋求し推究しているのである。無始以来無明海に流転し続けてきた自己存在への厳しい凝視が、直ちに久遠劫来の如来の大悲願心を尋ね当て、身に直観し感得しているのである。本願の三心が結局疑蓋無雑の真実の一心に凝集し、それが一心帰命の信として自己に現前し現成しているという了解には、その現前現成の内景として、法蔵となって現働する如来の願心と自己の内なる自我心との激しい闘いのあったことを看過してはならない。すでに述べてきたように、五劫思惟とか永劫修行と教説される法蔵の願行の御苦労は、如来の願心がわれらの自我執着心をその根底から打ち砕いて、堂々と勝ち名告ってくる永くて厳しい因位の光景を物語るものであるといえる。

本願の三心の推求において、その義が真実心、大悲心、回向心と了解されたとしても、その体を求めて、親鸞は「至徳の尊号」すなわち仏の名号を体とすると了解された理解は重要である。如来の本願は「諸有の群生を招喚したまう勅命」（「聖典」二三二頁）である欲生心をもって根源となし、「本願招喚の勅命」（「聖典」一七七頁）である名号をもって具体的表現となすのである。この意義を明瞭に読み取られたのが、親鸞の本願成就文の理解である。親鸞における本願理解の特質は、念仏往生の願と理解されてきた第十八願を、その伝統を承けつつ信心成就の願と捉え、名号成就を諸仏称揚の願である第十七願に見定めたことである。そして本願成就文について、本願信心願成就文と本願欲生心成就文とに分ち、如来の本願の成就を、われら衆生における信心成就として明らかにし、その信心の成就は、如来の願心の回向成就、就中如来の欲生心の成就の他でないことを明らかにされたのであった。成就文の「至心回向」の願言を「至心に回向したまえり」と訓んで、われらに発起する信心は、如来の欲生の願心の回向成就であるという、

この親鸞の了解こそ、法蔵菩薩の発願と成就の意義を最も深く主体的に捉えたものといえる。

「至心回向」の願言について、親鸞は『一念多念文意』において、

「至心」は、真実ということばなり。真実は阿弥陀如来の御こころなり。「回向」は、本願の名号をもって十方の衆生にあたえたまう御のりなり。

（「聖典」五三五頁）

と註釈されている。親鸞が「回向」というとき、それはつねに「如来の回向」を意味するが、いま「回向は、本願の名号をもって十方の衆生にあたえたまう御のりなり」という。回向とは、「本願の名号」がわれら衆生に与えられている事実、この事実を回向という、この了解が重要である。本願の名号は、言うまでもなく「南無阿弥陀仏」であり、「帰命尽十方無碍光如来」である。この本願の名号がわれら衆生に与えられているということは、「尽十方無碍光如来に帰命せよ」という、如来の大悲招喚の中にあるということであり、したがって「尽十方無碍光如来に帰命す」という、帰命の信がわれらに獲得されていることを意味するものである。すなわち本願に帰した帰命の信とは、そこに生き生きと名告り出る本願の心、すなわち「尽十方無碍光如来に帰命せよ」と名告り出る願心、「欲生我国」の招喚の声をはっきりと自証している自覚なのである。本願の名号の現前は、われら衆生における本願の信の獲得に他ならない。親鸞が本願の信をつねに「選択本願の行信」と捉えた所以である。

親鸞は、本願の名号のもつ意義について、「行巻」の標挙の文で、

諸仏称名の願　浄土真実の行　選択本願の行

と掲げて、「浄土真実の行」という極めて積極的な意味を見い出されたのである。その意味は、衆生に浄土としての真実功徳の世界を開き示す行である、ということではないか。われらの無明流転の虚妄の生を破って、清浄にして真実である無碍光如来の世界を、われらに開示する行である、という意味であろう。念仏を「本願の名号」と捉え「浄

土真実の行」と理解された理由と根拠について、親鸞は「行巻」の最初に、次のように述べている。

謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。この行は、すなわちこれもろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功徳宝海なり。かるがゆえに大行と名づく。しかるにこの行は、大悲の願より出でたり。

（「聖典」一五七頁）

法然において、称名念仏が往生浄土の行であるのは、それが「かの仏の本願の行」（『選択集』・「真聖全」一・九三五頁）であったからである。ところが親鸞は、その深い意義を尋ねて、念仏を「本願の名号」と捉え、如来回向の行、すなわち「大行」と了解し、したがってそのような本願の名号は、ただに往生浄土の行であるのみでなく、むしろ「一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまう、大慈大悲のちかいの御な（名）」（『唯信鈔文意』・「聖典」五四七頁）として、われら衆生に浄土の真実功徳を開き顕す行として「浄土真実の行」と解されたのである。親鸞が大行としての念仏を、単に称南無阿弥陀仏といわないで、「称無碍光如来名」といわれたのは、南無阿弥陀仏の名義に立って、すなわち無碍光如来の願心に帰して、如来の願心の名告りに目覚め立つという、本願の名号の自覚性を明瞭にするためであった、といえる。本願の仏道においては、名は単に名ではなく、本願の行としての名である。その名は、如来が如来自身を失わないで、しかも衆生の行となるという事実を意味する名である。これが回向である。衆生の行となるとは、衆生の行信となるということであり、如来自身の行が衆生の行信として現前し躍動するのである。

念仏を本願の名号と捉え、如来の無碍なる願心の躍動する大行であることを、親鸞は、「この行は、すなわちこれもろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり」といわれたのである。諸の善法・諸の徳本とは、恐らく法蔵菩薩の願行、就中五念門の行と五功徳門の行を意味するものではないか。帰命の信の一念に、法蔵菩薩の五念門の行がわれら衆生の上に五功徳門として成就することを、親鸞ははっきりと感得されたに違いない。すなわち行信の大きな背景と根源を、いま深々と感得し、自証されたのである。そしてさらに、念仏が大行である決定的な理由として、親鸞

は、この行は「極速円満す、真如一実の功徳宝海なり」と言い切られたのである。何と積極的な信仰的自覚の確信を表白する言葉であろうか。人が大行としての念仏に生きる身となるとき、自らの無始以来の生の虚妄流転が根底から打ち破られて、この身に圧倒する力をもって現前し現成するものを、いまはっきりと自証されたという、確信的は叫びである。何が現前したのかといえば、「真如一実の功徳宝海」である。「一実真如ともうすは、無上涅槃なり」（「聖典」五四三頁）といわれるように、大宝海にたとえられるような如来の功徳が、すなわち一実真如の功徳のはたらく無上涅槃の世界が、圧倒する力をもって現前し、真如一実のはたらく世界に、自己を見い出すこととなった、というのである。本願の名号に帰する帰命の信、すなわち本願の行信において、無明流転の身が転ぜられて、大般涅槃無上道に立って生きるものと成るのである。この信仰的確信を得たとき、親鸞は、念仏を、称名を、「大行」と断言し、「浄土真実の行」として無上の法、最上の法と力を込めて顕揚されたのである。

選択本願の行信、すなわち如来の願心の回向成就としての信とは、如来の回向を最も深く体験し、如来自証の無上涅槃の功徳を自証する自覚であるから、いわば浄土の開示された生を生きるものとなることである。その場合の浄土とは、無論無限の彼方に思考されるような他世界としての浄土ではない。「仏はすなわちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり」（「聖典」三〇〇頁）といわれるように、本願の行信に自証される浄土は、不可思議光の世界であり、無量光明土である。世親が『浄土論』で、浄土を三種荘厳・二十九種の功徳成就の世界として開顕されたように、浄土が開示されたということは、一心帰命の信の自覚内容として、浄土の功徳がいま深々と体験され自証されているということである。そのような驚くべき感動を、親鸞は『尊号真像銘文』で不虚作住持功徳の文を釈する中で、

よく本願力を信楽する人は、すみやかにとく功徳の大宝海を信ずる人の、そのみに満足せしむるなり。如来の功徳のきわなくひろくおおきに、へだなきことを大海のみずのへだてなくみちみてるがごとしと、たとえたてまつ

るなり。

（「聖典」五一九頁）

と述べている。一心帰命の信は、浄土の功徳を自証する自覚であるとすれば、その信は、欲生の願心の回向成就であるが故に、自証された浄土の功徳を身を挙げて行証する意欲として展開するものである。それが一心願生の信である。「普くもろもろの衆生と共に、安楽国に往生せん」という願生浄土の仏道に立つものとなるのである。浄土の功徳を行証せんとする能動的な信、それが回向成就の信である。